

NUA PRESS

2015 no.22

OB・OG展2015を開催！

昨年に引き続き、同窓会主催の「OBOG展2015」が開催されました。

今回は、アーティスト、デザイナーとして社会で活躍されている、犬飼真弓さん(36期洋画卒)・尾野訓大さん(32期版画卒)・島村舞さん(33期デザイン卒)・河地貢士さん(23期デザイン卒)4名の方々の作品を展示いたしました。

芸術の役割のひとつとして「社会に対するメッセージ」があります。今回お集りいただいた4名のアーティストの皆さんも、この現代に生き、社会と

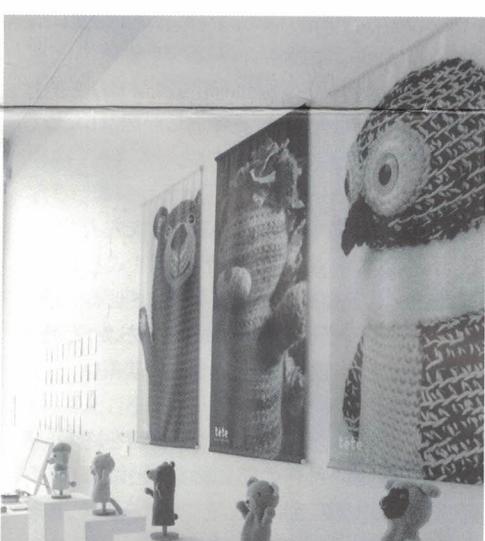
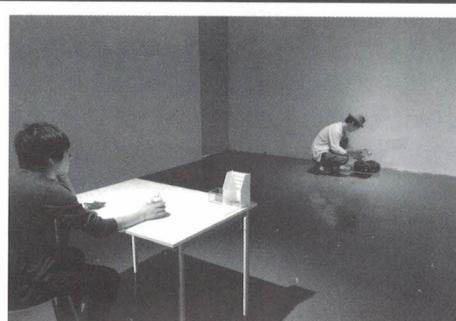
の関わりの中でそれぞれが、メッセージを発信しています。メッセージが個性となり、見る人に感動を与えています。それぞれの作品から、どのようなメッセージが発信されているかに想いを巡らせてみると、将来目指しているクリエイティブな活動のヒントを、そして作品を通じたふれあいの中から、将来の目標設定の一助となる発見ができるのではないかでしょうか。

また今回は、本学の非常勤講師そして広島国際学院大学講師であった、26期卒業の故兼田貴子

さんの生前の制作活動や作品を一部ですが展示させて頂きました。

本展の開催にあたり、ご協力ならびにご支援をいただきました同窓生の皆様、関係者各位、またご協賛いただきました株式会社ヤオキン様に置きましては、誌面を借りて厚く御礼申し上げます。

名古屋芸術大学美術・デザイン学部同窓会
会長 中島弘敬



上=ギャラリーの様子。左側の作品が犬飼さん、右奥に尾野さんの作品。中段左=尾野さんの作品。暗い空間で咲いている花々を長時間露光することにより映し出される世界。中段中=河地さんの作品。床にちらばったアルミ紙の小さな造形物をロボット掃除機が定期的に集めて回るというもの。観覧者が制作するアルミ紙の制作物はチャリティも兼ねられ募金制になっている。中段右=昨年逝去された兼田さんの作品。主に名古屋芸大で兼田さんと関わった先生方や友人からのコメントも上映された。下段左=島村さんの作品。手前から並ぶのは愛らしくどこかユーモラスな編みぐるみ群。下段中=オープニングパーティで「うまい仏」のパフォーマンスを行う河地さん。続いて犬飼さん、島村さん、搬入中の尾野さん。



同窓会 新体制発足!

昨年の総会・懇親会を機に4期デザイン卒の青木高弘さんから同じく4期デザイン卒の中島弘敬さんへと会長の職が引き継がれました。お二人から会長という職について、またこれまでとこれまでの同窓会についてお話を伺いました。

——本日は新旧の会長の対談ということで、お二人からお話を伺います。まずは青木さんから。

青木 首洗ってきました。(笑)

会長としての道のりと重圧感

——同窓会の会長を解かれて半年が経ちました。今もお時間があれば会議に参加していただいているので、あまり会に対するスタンスは変化がない様な感じですが、ご自身はどう感じいらっしゃるのかなと。

青木 やはり自分でもあまり変わった気がしていませんね。でも会長というのは、ちょっとオーバーにいうと孤独なものなので、やっぱり何かあった時に自分が責任をとらなきゃいけないとか、みんながせっかく来てくれるから有意義な会にしていかなきゃいけないという思いがあったので、それなりの重圧がありました。今回中島にかわってもらってそれが解けた…

中島 開放された?

青木 そうだね。自分ではそれほど気がついてなかったけど、会長職が解けた今思えばそれなりに重いものじよってたんだなと思います。

——孤独とか重圧感とかどういう時に感じてらっしゃったんでしょうか。

青木 いつもっていうわけじゃないですけれど、同窓会というものを正常進化させなくてはいけない、会をすこしずつでも右肩上がりに進めいかなきゃいけないと思ってはいたものの、思ってる程にはなかなか進まなかった。それから自分

が理想に思っていた地点、目標を掲げていたところへ到達することが出来なかったまま、中島にバトンを渡した部分がたくさんあったので、そう言う意味ではいろいろと思うところがありますね。

——ご本人の予想以上に長い任期だっと思うのですが、結局何年務めて頂いたのでしょうか。

青木 まさかというくらい長かったです。よくよく調べると18年でした。僕は今居る同窓会の役員内で唯一の設立メンバーになるんですよ。僕の前に吉田さん(2代目会長)が3年、初代会長が4年、とそこから会長になってプラス約18年ですか…

——4年+3年+18年…25年!

青木 最初は準備会みたいなものを名古屋駅付近で日曜日にやっていました。それでなんとか立ち上がってから、この体育館にある同窓会室で第1回の会議に漕ぎ着けて…。それから長い月日が経ちました。いくつも事件があったし、会議を月一開くとっても役員が来てくれなかった時もありました。ある年はいざ総会・懇親会の蓋を開けてみたら、役員以外ゲストは数人で全員で30人くらいしか居ないとなって、しかたなく音楽学部と共に催させてもらうという時期もありました。それが今や懇親会には200人オーバーのゲストが来てくださる様になって、よかったです。

——同窓会に青木さんが関わりはじめた頃と比較して今の会の評価はどうですか?運営方法や会の成長度などかなり進化したと自負がありますか?

青木 そんなことはないです、初代の会長のときもキッチリやってらっしゃいました。当然当時はどういう会にしていくか手探りで始まって、初代と2代目の会長が形を作ってくださったというベースがあって、そこでこの会を受け継がせていただいた。

会長職を経験させていただきましたが、元を正せば最初は先輩方にそそのかされてその場に行ったら会議をやっていて、行き当たりばったりというか、成り行き上そのまま参加することになり、その先まさか会長になろうとは夢にも思ってもみなかつですからね。気がついたらここにたどり着いていたっていう感じです。

会長職とは何か

——世代的にはお二人は?

青木 同期です、中島とは。

——中島さんは同期というお立場から、青木さんが会長をしてらっしゃたのをご覧になってどう思われましたか?同窓会の総会などには参加してくださっていたそうですね。

中島 ああ青木大変だなあ、毎年大変そうかなあって見てたね(笑)

青木 もう実は10年くらい前だったかな。彼がまだ社長じゃない時に会長変わってくれよって。やはり同じ人間がずっと何年も続けることは好ましくないので、「お前ちょっとやってくれないかい」と話を振ったんですね。

会長をやってみるとわかるんですけど、意外と時間を取られてるんです。そこで人間的にも相応しくて、仕事の内容や役員という立場からしてもたぶん時間も取れるだろうと思って…



中島 アイツ(中島)は時間があるって勝手に青木が思い込んでね(笑)

青木 そう(笑)だからね、中島しか居ない、って思って打診したんですよ。

中島 変わっても良いと返事はしたんだけど、ちょうどその時、急に会社を引き継ぐことになって、社長として会社自体再スタートさせるって話になったんで、それどころじゃない、ちょっと待ってくれってことになってしまったんですよね。

青木 だから本当は10数年で会長職を終える予定が、18年もの長きの間勤めることになってしまったのは中島のせいんですよ!(一同笑。)

——青木さんから話をいただいたときは、どんなお気持ちでしたか?二つ返事でやりますというような?

中島 僕としては、やはり青木が長い間やってく



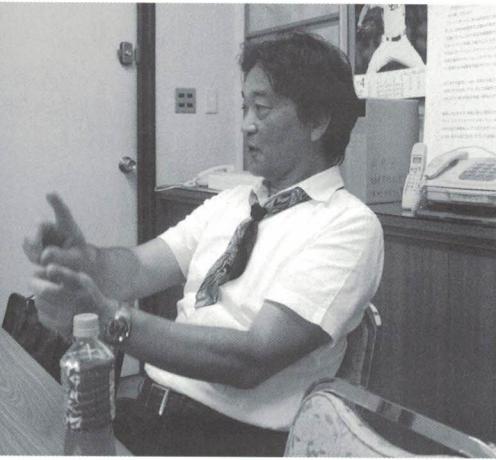
第27回総会後の懇親会場にて、これまでの功績をたたえ、中島新会長より花束を受け取る青木名誉会長。

れたことに対して敬意を表さないといけない。青木に対しても失礼だしそんな彼から言ってくれるなら逆に断る理由が無い、僕自身断れるだけの言葉を持ってなかつた。

これは当然名古屋芸大の歴史が積み重なっていくように、後輩がどんどん出来てくるわけだから順番に受け継いでいくべきだし、僕の後輩にも受け継いでいってくれればいいなと思う。それが自然っていうのかな、大きさかもしれないけど子どもが親の家業を継ぐような感覚かな?そういう流れをこれから作ってけたらいいんじゃないかな。

やはり青木だって仕事が忙しかったり、辛い時期もあったと思う。でも僕も含めて同窓生のみんなが青木に甘えていたと言つていいわけだから、そんな青木に対してやっぱり敬意を評されなければいけないという意味でも自然に引き受けることができた。

青木 僕が受けた時は決してやりたかったワケでは無いけれども、自分でよければやるよ、っていうわりと自然体な感じで受け継ぎましたけどね。きっと中島もあの時の僕と同じ様な感覚だったんじゃないかな。



同期のお二人。(左中島氏、右青木氏)

——学生時代に培つて来た信頼や人間関係もあって、今そういうバトンを渡せる相手であったのもありますか?

中島 そんな大層なことは無いけどね(笑)まあでも仕事の話とか思つたりしたことを、今でも電話したりすることはあるよ。

青木 同窓会はボランティアで成り立っている会なので、お金が絡んでない分ナイスな面がある。役員の皆さんのがんばりは仕事終わってから疲れてるところに集まってくださっている。会の事務処理をこなしてくださっている大学の先生方や職員の方々にしてもそうで、本当に感謝しています。皆さん献身的にこの会に関わってくださっているわけなので、皆さんにかわって嫌なことや面倒なことといった面を自分がすべて背負うくらいの気持ちでやってくれないと困ってしまう。いってみれば会長職というのはバカ…「会長バカ」になれないといけないので、会社役員としてあらゆる局面を乗り越えてきた中島ならそうな

れるな、できるなど確信がありましたね。

——中島さんは今年の4月からは「会長バカ」になる覚悟をもって挑んだと(笑)

中島 そうですね(笑)負け負ったからにはやらないと。もちろん彼には任命した責任があるし、僕にも受けた責任というのがあるからね。お互いに恥じないようやらないといけない。

——初代、2代目が7年、青木さんで18年、そうなると中島さんは30年くらい続けいく計算ですね。(笑)

青木 計算上そうなるね(笑)

中島 はい?!我々もう60歳だからね。(笑)そこまではたぶん無理かなあ。(笑)

僕としてはこういう組織というのは、自然体でうまく流れていければいいなと考えていて、さつき言ったみたいに自然な流れで次へと受け継いでいけたらいいなと。会社というもので考えていくといふに会社という組織を作つて上手に回していくかなんだけど、組織がちゃんと出来ていれば、社長が居なくとも会社は回つていく。これは会長が居なくていいっていう話じゃなくて、むしろ僕なんかはお飾りくらいでいいのかもしれない。あとは同窓会が皆さんの意思で回つていく様な形にしたい。青木が作り上げてくれたものを成熟させて資産を受け継ぎながら、ちょっとずつそういう利益を生んでいけたらいいなと思っている。

同窓会の未来を考える

——そのお話が具体的な方向性として、今話がでてきている同窓会の法人化ということになりますか?

中島 それもひとつの手段であつて、それが目的ではない。組織を運営していくうえで、法人化することもありなんじゃないかって考えて、いろいろ調べている段階ですね。様々な手段を探しながら、皆さんの合意の中で進めていきたいと思っています。今は組織をもっと固めていく時期だと考えていて、今色々な意味でも少しふわっとしている。なんの後ろ盾もない状態。組織としてはもっと根を張つてしっかりしたものにしていかないといけない。まずは提案してみて、そこから皆さんからのさらなる意見やアイデアができるのを期待しているところです。独断できめるわけではなくて、会全体で相談して良い方向を探していくらとを考えています。そういうやり方が会の運営やそのものの健全な経営につながっていくんじゃないかな。

——組織作りという話で、青木さんが会長の時に掲げてらっしゃった支部づくりについて伺いたいのですが、今現在では、なかなか具体的に進ん

でいくのは難しいのかなという状態ですが、どうでしょう。

青木 支部については東京に限つて言えば、メンバーを固めて運営できる手前までできているのですが、いろいろな意見を持ってらっしゃる方もいる。しかも東京で手を挙げてくださってる皆さんにはもちろんお仕事はしてらっしゃる方ばかりではあるけれども、組織としては東京というベースに何も無いので、会議ひとつ開くのにも場所をどうするか、何をするにしてもやはり費用がかかる。つまるところ本部と東京で予算が倍かかってくるということがネックになっています。現時点では本部をもっと固めていかないと、支部というのは難しいというのがはっきりしてきた。なので、現在の本部今の同窓会にもっと外部から参加してくれる役員の方を増やすというの、組織作りという話を含めて一番の責務でもありますね。

——会則にも支部をつくるというのは明記されているわけなので、これからも進めていかなくてはなりませんね。

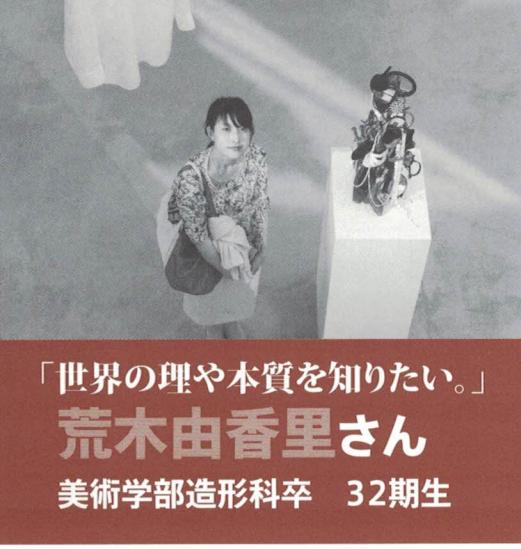
青木 東京は作るべきだし、良い意味で大学側へ情報を送り、支部からでた情報を大学にフィードバックしていけば大学にもプラスになる。支部作りについてもそうですが、この名古屋芸術大学という大学から数多くの卒業生を輩出して来たわけですよね。皆さん社会に出て、様々に努力してきた方々なわけです。それなりの立場や年齢になってきて、大学に対しても同窓会という組織を通して、ちゃんと信頼関係を保ちながら発言権を持っておつき合いしていく会に成長していくことを、新会長には望みますね。

中島 目標が定まれば、手段はいろいろ考えていけばいいと思います。大学と同窓会を繋げていくというのが一つの命題であるならば、その為に何をするべきか。皆さんで話し合つて知恵を出していくをきたい。今あるやり方に捕われずもっと新しいやり方があるかもしれない。それを考えていくのが、我々の使命だと思っています。

——同窓会の活動として会報、名簿を出すこと、それから総会・懇親会の開催、これらを基本として運営していくことが100%だとしたら、さらにプラスα新たなチャレンジになります。具体的には昨年からOBOG展を2年続けました。

中島 基本の活動にさらに足していくというのは、限られた予算の中で考えると選択肢で何かを削らないといけないという局面になるかもしれない。それは冷静に判断して答えを出すべきでしょう。

今後も同窓会としてますます刺激的な提案を同窓生の皆さんに、そして在学生や大学側にも提供していくよう、努力していきたいと思っています。



「世界の理や本質を知りたい。」
荒木由香里さん
美術学部造形科卒 32期生

——今年の4月にブリュッセルで開催された展覧会「WABI SABI SHIMA」への作品制作のために、フランスのアートスクールにレジデンス滞在されたと伺いました。レジデンスに至った経緯など、教えて下さい。

今、名古屋と京都の2つのギャラリーに所属しているんですが、海外方面での活動拠点にしている、京都のギャラリーのスタッフが、銭湯で偶然今回のキュレーターと出会ったのがきっかけです。その時に所属アーティストのファイルを見たフランスのキュレーターが作品に興味を持ってくれて。それで彼がプロフェッサーをしている「Institut Supérieur des Beaux-Arts Besançon」というアートスクールに1ヶ月レジデンス滞在して、展覧会の為の作品を制作することになりました。



レジデンス制作をしていたアトリエ。

——レジデンス制作の中で一番心に残ったことは何ですか？

マルシェや蚤の市に行ったこと。また、ロンシャンにあるコルビジェの礼拝堂や世界遺産を幾つか見に行けた事です。あと、植物が日本とは違う。特に街路樹等の剪定が違うのかな。電線が無いので街路樹が高くて、周りの建物が違うように合わせて植物の形も違うのかなと。その形が新鮮でした。それから空模様。

——ブリュッセルで展示された作品には「女性性」「ユニセックス性」というテーマがありました。今までの作品でも「女性性」が強くシンボルとして

出ていたように思います。制作場所が変わったことによって、その感じ方に変化はあったのでしょうか。

作品を作るとき、場所から入る作品とテーマから入る作品があるので、今回は制作期間が1ヶ月と短いレジデンスだったので、テーマは決めてから行きました。なので、テーマの大きな変化はないですが、制作には影響があったかと。とにかく、空が広い。毎日空や雲を見ていたので、形に少なからず影響が出たと思います。私はアッサンプラージュ(立体的なものを積み上げたり寄せ集め、貼付ける方法)で作品を作り上げますが、作品の素材を現地で集める事で、作品に日本とヨーロッパの相似点をみてみよう、とも試みました。

——今回選ばれた理由として、靴や既成品で構成された作品がヨーロッパの人には日本の生け花のような印象を与えたのでは、と伺いました。展覧会では来場者からどのような反応があったのでしょうか。

アッサンプラージュや既製品を使った手法、作品は特に珍しくはないと思うのですが、「面白い」「美しい」という感想を頂き、珍しがられました。赤いスカートの作品(蚤の市などで手に入れたスカートを構成した作品)は“フランス人は赤いスカートはセクシー過ぎてあまり履かない”という声があったり、国による色の捉え方の違いを知りました。良い発見でした。

——今年から美術学科のアートクリエイターコース4年生の授業を担当されていますが、どのような授業をしていますか？

卒業制作となる自由制作を担当しています。授業をするというより、学生それぞれの持っているものを引き出せるように話を聞いたりしています。また、どんな風に考えて制作するのか観察しています。

——久しぶりに母校に来られて、どうですか？

私のいた頃は外で何かをしている人が沢山いたので、今の学生が真面目に感じます(笑)アートクリエイターコースは様々なジャンルの人人が一部屋にいます。なので制作は様々。でも、この先違うジャンルの人と長期間同じ部屋で制作することって多分無いので、それを面白がって、お互い刺激し合える環境にいる事に気づいて、どんどん吸収して欲しい。

——荒木さん自身は学生の時から卒業して今まで、制作する意識に変化はありましたか？

学生のころは自然や光が気になってテーマにしていました。卒業制作は4年間の集大成というより、ガラッとやることを変えてスタートにしました。「これからやるぞ！」という意気込みだったかも。その後、ロンドンのテロの頃に、知人が現地

にいたり、祖母が亡くなり、「もっと大事なことを作品化したい」と意識に変化が出ました。それからは、軸となるテーマは同じで様々な制作に取り組んでいます。

また、ギャラリーに入り責任感が強くなったかと。展覧会をやる度に沢山のアーティストと知り合い刺激を受けて、より自分の意識やスタイルが見えてきたかな、と思ったりします。

——そんな荒木さんの今、一番気になること、楽しいことはなんですか？

大相撲。ハマったきっかけは、制作の休憩に相撲中継を見だしてから。力士や行司、呼出にも歴史や伝統があって、知れば知るほど面白くなりまして(笑)。実際に観に行ってきました。やはり生は楽しかったです。

それからもう一つの楽しい事は料理。制作と一緒に下ごしらえや手順を考えたり、食材の相性を考えたりするのが楽しいですね。

——最後にこれからの夢、今後の作品の展開などお聞かせください。

世界の理や本質を知りたくて、ひとつひとつ気になるテーマを確認しながら制作しています。最近は「女性」がテーマです。

10/17(土)~31(土)までAINSOFTディスパッチにて個展、10/20(火)~25(日)までgallery +cafe blankaにてMYY Booksの展覧会(白澤真生、荒木由香里、尾崎芳弘によるユニット)があります。その後、11月後半には岐阜県現代陶芸美術館で公開制作をします。

——(S)



展覧会での荒木さんの作品。

春陽会会員推举!
長田文実香さん
絵画科洋画専攻卒 28期生



長田さん。作品の前にて。

——今年開催の第92回春陽会で会員になられたとのこと。おめでとうございます。春陽会との活動はいつ頃からでしょう？

春陽会に初めて出品したのが19歳（大学1年生）の時の中部春陽展（中部地区の春陽展で、毎年秋開催）でした。春陽展（東京での審査の公募展）は次の年、20歳の時（75回展）から毎年出品しています。今年の92回展で18年目になります。

春陽会は公募団体で、会員になる基準は現在3回の受賞、4回目の受賞、または賞候補になることで、私は今年ちょうどその年になり、会員になることができました。

——卒業後から一貫して抽象的なモチーフを描かれていたと思いますが、色合いは大分変わりましたね。

今はブルーグレーを基調とした作品になっていますが、学生の時はどちらかと言うと赤、黄、青など原色に近い、和を感じさせるような色使いでした。なかなか女性の作品だとは思ってもらえないで（笑）

大学の4年間から今までの間で大きなテーマ性は変わっていないんですが、在学中、少し描き方が変わりましたね。1年の頃はまだまだ抽象的ではなく、初めてのタイ旅行で魅了された遺跡などの“古きものの中に感じた生命力”そのままの部分が半写実として入っていました。

——ちなみに今年の春陽展に出品した作品『誕生』には、制作のエピソードがあつたりしますか？

ずっと昔から生命や誕生、生命力、再生、儚さなどをテーマに描き続けてきました。でも子どもが産まれてからはより一層自然にその意識が強くなっているかもしれません。毎年作品を見て頂いている第三者の方から良くいわれます。妊娠中も描いていて、いつもお腹の中の子の事を考えている時期、それが自然に絵に出ててしまっているかもしれませんね。

——今年2人目のお子さんが誕生し、さらに絵画教室の講師もと、かなり多忙だと思うのですが、どのように制作していますか？

家族にはかなり協力してもらっています。仕事も絵も、元々一人の時には、親には理解してもらっていましたが、結婚して子どもが産まれてからは主人の理解も必要になってきます。制作の中盤までは子どもを背負いながらや、学校へ行っている間でも描けるのですが、やはり追い込みとなるとそうもいかず、親または主人に子どもを見てもらっている間に描いています。

——ご家族で運営されている、美術教室「アトリエ長田」での活動や様子をお聞かせ下さい。

大学3年の時から父の教室に一緒にについて学び、卒業と同時に自分の教室を持って、指導しています。現在は曜日毎に教室が違って、知多半島（半田市）を中心に12の教室があります。児童画／学童油絵・デッサン／一般／進学と4

コースに分かれています。下は4歳から上は80歳過ぎの方までいらっしゃいます。一番多いのは4歳～中学生ですが、受験生も中・高あわせて毎年10名以上。名古屋芸大にも毎年希望者があり入学しています。ありがとうございます。

皆さんそれぞれのレベルにあった指導を心がけています。大人の方は特にそれぞれの目標／レベルに合わせて制作をしていて、プロを目指す方までと幅広いですね。

——指導する上で嬉しかったことや大変だったことなど教えて下さい。

嬉しかった事は、アトリエ長田で指導してきた子供たちが、幼い頃はただ描く事が好きで、いつもじぶんの感じたままの表現を楽しむことができて、尚且つそれが周りにも評価されていました。そして進路を決める頃に、絵に携わることを目標してくれる事をとても嬉しく思っています。卒業後も、それぞれの目標に向かって活躍してくれる事を願っています。

大変だなと思った事は、昔より学校での美術の時間が少なくなっています。日常で美術に関わる時間がなく、美術への進路を決めるきっかけが減ってきていたと感じる事です。

——今の夢、これからの制作の展望をお聞かせ下さい。

春陽展に関しては、18年間通して目標としてきた事が達成でき一段落ついたので、制作については今のテーマ性をより追求し、自分の表現したいと思う制作を進めていきたいと思っています。今まで積み重ねてきたものに、



新たな世界感や描写方法を加えて発展できると良いなと思っています。

10年近くアトリエ長田の教室とは別に色々なショッピングモールで開催されるイベントでも子供たちに工作の指導をしてきました。これからも少しでも多くの人達に美術に関わって頂けるように、色々活動ていきたいです。ここ数年愛知県美術館で9月に行われる愛知県文連美術展（公募）の審査員をしているので、春陽展も含めてですが多くの学生さん達に、こういった公募展にもどんどん出品していただけるといいなと思っています。

——これからの発表も楽しみにしています。ありがとうございました。 ——(S)

学んだ「鳥の視点」を生かして

天野陽史さん デザイン学部 34期卒

剣岳が見渡せる橋の上のツアー中の記念撮影。一番左が天野さん。

——ライフスタイルデザイン(現デザインマネジメント)コース卒業の天野陽史さんにお話を伺います。まずは、お仕事の内容についてお聞かせください。

はい、簡単に言えば地域の観光振興です。働いているのは、上市町(かみいちまち、富山県)という所。日本有数の名峰「剣岳」のふもとの町で、雄大な自然に囲まれ、立山連峰の雪解け水による豊富な湧き水によって育まれた里芋やお米などの農産物。そして昔ながらの里山の暮らしを大切に守っています。また、修行寺や禅寺が点在し、祈りの文化も根付いています。そんな地で、これまで地域の資源(自然や文化、観光地、風習)を活かしたエコツアーや(エコツーリズムに則った観光ツアーや体験)を、地元の人たちと協力して企画し、そのツアーを案内するガイドを養成・組織化し、販売までを行っています。

——エコツーリズムという言葉にあまり馴染みがないのですが、どのような意味でしょうか?

エコツーリズムとは、地域資源を積極的に活用しながら、守っていこうという新しい観光の在り方です。現在、観光は「発地型観光=都市圏で企画され、大型バスなどで現地に送客し、周遊する観光・団体旅行」から、「着地型観光=現地で企画・運営され、お客様が現地まで自ら足を運び体験する観光・個人旅行」へと、流れがシフトしています。上市町は、高齢化・少子化によりまちの賑わいが減退し、若者の都市圏への流出などを課題としていて、観光により交流人口を拡大し、まちの賑わいを生み出し、引いては観光による新産業の創出を目指しています。まだまだ、その成果ははっきりとは現れていませんが、徐々にお客様から申し込み

や問い合わせがあり、ゆっくりですが芽が出つつあります。

——お話を伺って、上市町に大変愛着があるように感じられました。ご出身地なのですか?

いえ、僕の出身は愛知県の岡崎市で、名古屋芸術大学大学院を出るまでずっと実家暮らしでした。ここで働くことになったのは、大学院で知り合った現在の妻が富山県出身で、結婚を機に黒部市に移住することになったからです。

上市町に愛着がある、とお感じになったのはやはりエコツーリズムの仕事は人と多く関わるからかもしれません。いかにこの地域を知つていただき、楽しんでいただけるかを考え、実行していく中で、農家や商店、お寺や企業、そしてガイドの方々など、年代や規模の大小に関わらず、いろんな方とお会いします。会ってお話し、協力して商品を作り上げるので、やっぱり愛着というか、「好き」になれないとできない仕事です。

——人との関係でもその場所の魅力を発見し伝える点でもデザインの力が發揮されますね。例えばどのようなツアーがあるんですか?

『～ココロ旅～ 大岩colorier & ランチ』というガイド付きツアーも、取り組んだ中のひとつです。1300年の歴史を有する「大岩山日石寺」を散策し、国の重要文化財の巨岩に彫られた「不動明王」や滝行で有名な「六本滝」など、自然と調和したお寺の雰囲気を堪能し、レトロな和風旅館で《colorier》(フランス語で「彩色する」という意味)という体験ができます。たっ

父との落書きがはじまり

植田明志さん

美術学科

アートクリエーターコース 41期卒

——クリエーターズマーケットやワンダーフェスティバルなどの、クリエーターが一堂に会して展示販売する市に精力的に参加してらっしゃいますね。やはり手応えがありますか?

有難いことに、やはりあります。作品をお迎え頂けることもそうですが、作品を通して色々な人と出会える、という実感をそのまま、手ごたえとして感じています。

——学生の時に講評会やレビュー、卒展などで作品を他者(学外の方含めて)に見せる機会というのはあったと思います。その頃と今では何か意識の変化はありましたか?特に展示即売会という場だと、制作者且つ売り主という立場で来場者と接するわけですが、いかがですか?

実はあまり意識の変化はないんです。もしかしたら僕が気づいていないだけなのかもしれません。特に卒展では、僕自身の力試しとしての意識がありました。それがそのままに今の展示即売会という場に反映されているだけなんです。だから、展示即売会の数だけ卒展がある、といったふうに、ひとつひとつのイベントに、その時の

自分ができうることをやりきり、全身全霊で挑んでいます。そうじゃなきゃ、意味がないと思うんです。

——今作品を取り扱ってくださってるギャラリーの方とそういう場で出会ったそうですが、その時のお話を聞かせてください。

僕がはじめてクリマに出展した大学3年ときに、今のがらのギャラリーのバイヤーさんが声をかけてくれたんです。本当はもうひとつのギャラリーにも声をかけてもらっていたんですが、あまり悩むことなく、今のギャラリーに決めました。すごい凝ったつくりのDMを頂いていたんです。ピーンときました。

——卒業制作展の時の作品は拝見しています。その時にくらべてかなり緻密なつくりになっていますよね。当初から物語の1ページを覗いている様なそんなキャラクター造りがとてもユニークでした。それがより具体的な役柄を与えられている。木の根、服のレース、着色の仕方ひとつとっても、ディテールのつくり込みが非常に深く厚みが増していってるように見受けられます。

卒業制作はとにかく大きなものをつくってみたい。慣れない素材でしたし、ディテールのバランスが必要でした。実は、卒業以前のほうが、細かいディテールを作りこんでいました。今のほうが、要素としては少ないんです。最初の頃はとにかく細かいものをつくって、びっくりしてもらおうと。そう思っていたんですが、だんだんと、もういいかな、って思

た今見てきた風景が描かれた数種類の線画から、好きな絵を選んでいただき、色鉛筆で彩色していきます。写真では撮影できない気持ちを色にのせて、旅の風景を記念に持ち帰るというツアーです。体験後、大岩名物のそうめんや地元山菜を使ったランチも楽しめます。

——その土地でないと見たり、体験したりできることは心を充実させてくれそうですね。

エコツーリズムは資源を商品化することで、そこに経済的な価値を生み、それにより整備や保全活動に結びつける、あるいはその資源を活用するルールをつくる、という循環を目指します。そうすることで、資源を守り残しつつ地域に活気が生まれ、住民の方も自分たちの地域にもっと誇りや自信を感じてもらえます。そうすることが地域全体の底上げにつながるのではないか、これがエコツーリズムの考え方です。

また、基本的に「人」の関わりも重視します。特に、資源の魅力を最大限に引き出し伝えるガイドの存在が不可欠です。それが、専門的な職能であるエコツアーガイドの場合もあれば、その地域の住民の方、例えば、畠の生産者がその役割を担う場合もあります。ようするに、単にその資源と触れ合うだけではわからないような、その資源の意味や価値を地域外からのお客様にしっかりと伝えることが、よりいっそう資源や商品を輝かせ、引いては地域全体のブランド価値を引き上げてくれます。

——なるほど。天野さんは名古屋芸大ではライフスタイルデザインコースを専攻されていましたが、それを踏まえてこの仕事を選ぶ際のきっかけになったこ

とはありましたか？

ライフスタイルデザインは、グラフィックやスペース、メディアやクラフトなど、領域を限定しません。逆に、いろんな領域を行き来して、問題や要望を最適な方法でクリアにしていきます。そのために必要なことは、物事を俯瞰して捉える鳥のような視点です。課題のすべてに通底するのは、編集やリサーチワークであれ、いわば鳥の視点たる「ディレクション力」を鍛えるためだったと思います。

私は大学時代に地域活性化を目的にしたアートプロジェクトに携わっていたことや、授業の中で『どんな食材でも料理の仕方次第で美味しい料理になるように、デザインでも同じことができる』という萩原周先生の教えを思い起こし、観光振興という自分にとって新しい分野に飛び込みました。その言葉を胸に、「デザインを携えて生きる」という構えがあれば、どんな分野でも飛び込んでいけますし、活躍できると信じています。今回、この分野に取り組んだのは、そういう背景が自分の中で血肉となっているからだと思います。

また、地方で仕事を就いてみて感じるのは、必ずし



六本滝。修行体験も出来る。



ツアーガイド中の天野さん

も「デザイナー」であろうとしなくても良いですし、それはいっていられない状況は多々あります。私は、デザイナーであり、編集者であり、営業、イベント企画者、ガイド、荷物運びの兄ちゃん、運転手、草刈り係、駐車場の誘導係です。状況によってありとあらゆることをする「何でも屋」になる必要があります。デザインを学んできた者にとって、「なんでこんなことをしなくてはならないのか！」と思う人もいるかもしれませんか、デザイナーに固執しすぎないことで、自分の新たな一面を発見することもできますし、地域の人たちから信頼を得ることにもつながっています。

——ライフスタイルデザインコースの通底は「鳥の視点」と聞いて、大変納得しました。デザインがまだ活用されていない分野で、人との交流、信頼があり良いデザインが生まれる。デザインマネジメントの後輩にも、このことに気づく機会が多く訪れ、素晴らしいデザインをしてほしいですね。ありがとうございました。

——(O)

い始めたんです。

新しいチャレンジをしたくて。それは僕が今まで「手数」の影に隠れていきた「バランスとセンス」でした。僕はずっとセンスがないのがコンプレックスでした。発想もありました。おまけにバランスをとるのが苦手でした。でもきっと、これから逃げていたら斬新なものがつくれないし、いつか飽きちゃうな、って思いました。

それからは、世界観、空気感、ディテールの足し算引き算などを総合的に考えて、作品自身の役割、キャラクター性を強調するよう意識しています。作品自分が考えている事、想っている事を、以前よりも淀みなく汲み取れるようになった気がします。

——作品を作っていく上で、イメージを膨らませていく作業というのがあると思います。

生み出される作品達はアリティよりも植田さんご自身のイマジネーションの中で生きている者ですね。犬であるけれど、ものすごく顔や鼻がデフォルメされてたり、クジラだけど脚が生えていて空を飛んでいたりする。そういうアートの源泉というのはどこにあるのでしょうか？

実は、小学2年生くらいのときの自由帳には、すでにクジラに足が生えていました(笑)

たぶんそのイマジネーションの源は、僕がもっと幼稚園くらいのときに、父が僕にふざけて描いてみせた、「手くじら」「足くじら」とかいう、足や手がピコンと生えた適当すぎるくらいのクジラのらくがきでした。たぶん、子供心ながらに、それらを「かわいい」

「おもしろい」と思ったんだと思います。こんなものがいたらきっとおもしろい。たぶん、それが僕の「想像上の生き物はおもしろい」という思考回路の根源になります。

そして、こどもの頃に読んだ「絵本」。絵本はほとんどのものがディフォルメされています。ディフォルメされ、必要最低限で再現された生き物たちのユーモア。絵本自身がもつメッセージ性。それを明確にするには、ただ正確なデッサンではだめなんです。ずっと目の前を通り過ぎるだけになっちゃう。どこか引っかかるところがないといけない。そんなふうに、今も絵本に惹かれていますし、今でも好きで読んでいます。僕はそれを立体で再現したいんです。立体絵本とか、まだまだ色々な可能性があります。

——最近ムック本に作品が掲載される機会があったそうですね。「スチームパンク東方研究所」というタイトルですが、どのような本ですか？

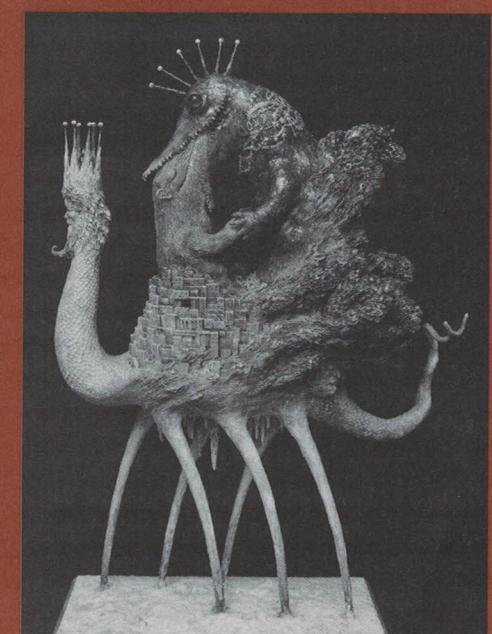
スチームパンクは、要するに子供心のロマンなんです。錆びたパイプ、退廃的なものや、歯車。アナログで動く蒸気機関。それがサブカルチャーのジャンルとして確立されたものですね。みんな何かをつくりたがっていて、スチームパンクはそれに手を差し伸べてくれるものでした。東京のイベントのときに出版社から声をかけていただいて、僕はスチームパンクティストではないですが、載せてもらっています。たぶんそれは、スチームパンクというジャンル自体が退廃的なもの

だけではなく、「空想する」ということに重点をおくようにシフトしているからだと思います。

——また近々で何か発表のご予定があれば教えてください。

近くは、冬のクリエーターズマーケット、冬のワンダーフェスティバルになります。個展は来年の秋ごろの予定です。お時間など許しましたら是非遊びにいらしてください。

——(H)



このたび名古屋芸術大学デザイン学部、同大学大学院デザイン研究科教授落合紀文氏が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表しますとともに、故人のご冥福をお祈りいたします。



昭和28年(1953年)名古屋市生まれ。
愛知県立芸術大学美術学部美術科卒業。同大学大学院美術研究科修士課程修了。
以後、デザインワーク、フィールドワークにもとづく、昭和のデザイン史資料を中心に研究。
名古屋芸術大学には昭和53年4月(1978年)より勤務。デザイン学部長、大学院デザイン研究科長を歴任。
野外活動研究会会員。
著書に『少年少女レトロ玩具箱』(日本図書館協会選定図書受賞。河出書房)
平成27年8月23日永眠。享年63。

2013年11月に行われた第26回同窓会総会・懇親会にご参加くださった時の落合先生

お知らせ◆事務局より

◆作品展に於ける後援について

現在同窓会では同窓生の作品展に対して後援を行っています。年々応募数が増えており、この度後援させていただく展覧会数の制限を行うこととなりました。また条件として初個展の方を優先して後援させていただき、過去3年以内に後援を受けられた方は何卒ご遠慮くださいますようお願い致します。またこれにともない、規約につきましても変更させて頂きます。

希望される方は後援規約に従ってお申し込みください。

同窓会ホームページ <http://nua-w.com/>

>>活動ページ <http://nua-w.com/activity>

このページ中程に「後援規約」及び、実際に依頼していただく際に必要な書類「後援依頼(様式1)」と事後「報告書(様式2)」のデータ(全てPDF)がダウンロードできます。

様式1 後援依頼

○年○月○日
名古屋芸術大学美術・デザイン学部同窓会
会長 中島弘敬 殿

第○期○○○科卒業
○○○○○印

下記の作品展について後援をお願いします。

- 1)名 称 ○○○○展
- 2)場 所 ○○○ギャラリー
(住所・電話番号)
- 3)会 期 ○年○月○日～○年○月○日迄
- 4)代表者(出品者) 氏 名(第○期○○○科)
電話番号
郵便番号・住所

様式2 報告書

○年○月○日
名古屋芸術大学美術・デザイン学部同窓会
会長 中島弘敬 殿

第○期○○○科卒業
○○○○○印

- 1)名 称 ○○○○展
 - 2)場 所 ○○○ギャラリー
(住所・電話番号)
 - 3)会 期 ○年○月○日～○年○月○日迄
 - 4)代表者(出品者) 郵便番号・住所
※氏名(第○期○○○科)・電話番号
注)※印は出品者全員記入
 - 5)入場者数 ○○名
 - 6)写真 写真○点添付致します。
- 以上作品展について報告致しますので後援金の支給をお願い致します。
振込先/○○銀行・○○支店・○○座・N o.○○
口座名義(フリガナ)

◆イベント

第28回 同窓会総会・懇親会

開催のお知らせ

第28回同窓会総会を、この11月に開催いたします。今年度も名古屋市池下にあります「ホテルルブラン王山」となります。

総会では昨年度の活動報告、これから活動予定、予算の收支報告といった、会員の皆様にとって大事な内容を議事運営しております。懇親会だけではなく、総会からご参加くださいますようお

願い申し上げます。

総会後に行なわれます懇親会につきましては、会費無料(ご家族の方含む)でございます。この会報誌と合わせて同封いたしましたハガキより出欠席をお知らせ下さい。皆様のお越しを役員一同、心よりお待ちしております。

記

○場所 HOTEL ルブラン王山 (〒461-8525 愛知県名古屋市千種区覚王山通8-18)

TEL 052-762-3151

会場ホームページ <http://www.rubura.org/>

○日時 平成27年11月15日(日)

○総会 15:00より 2階 千成の間にて／受付は14:30より／総会終了後、懇親会を行います。会費は無料。

※駐車場はございますが、すべて有料です。飲酒される方は、お車でのご来場はご遠慮ください。(地図など詳細は別紙にてご案内しておりますのでご覧ください。)

記事へのお問い合わせは…

〒481-8535

愛知県北名古屋市徳重西沼65

名古屋芸術大学西キャンパス内

美術・デザイン学部同窓会事務局 宛

tel. 0568-24-0325(大学代表)

fax. 0568-24-0326

同窓会ホームページ

<http://nua-w.com/>

◆現在同窓会では、月一度の会議、年一度の総会・懇親会などの活動に積極的に参加・お手伝いくださる同窓生を募集いたします。お気軽にお問い合わせください。

評議員	監査委員																				
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------

41	39	38	37	36	35	33	33	28	28	28	27	22	22	4	4	4	4	23	22	12	20	23	20	19	5	5	20	19	4			
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期			
デザイン	アイ	ト	う	こ	う	こ	う	こ	う	こ	う	こ	う	デザイン																		
日本画																																
磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	磯	佐	佐	佐	佐	加	加	加	加	福	福	青	小	鈴	浜	岡	中	岩	中	
本	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	竹	竹	竹	竹	藤	藤	藤	藤	海	海	木	林	木	辺	本	村	川	浦	井
遥	香	絢	絢	絢	絢	絢	絢	絢	絢	絢	絢	絢	絢	陽	陽	陽	陽	田	田	田	田	幸	幸	木	聖	由	昌	重	尚	義	隆	弘
2015年9月現在																																

同 窓 会 役 員 紹 介